

2019年度「研究者の横顔」レポート

氏名： 守田亮

1. 研究者になるうとしたきっかけ

これまで秋田県で肺がん診療を中心に勤務していました。その際のがん診療の標準化や情報伝達・収集の問題、医師の偏在化などの問題に直面しました。その後国立がん研究センター中央病院で勤務し、素晴らしい医療環境を確認すると同時に、このような医療環境を少しでも東北の各地域に届けたいと思うようになりました。また東北地方以外にも同様の問題に直面している地域が多くあることに気づきました。抗がん剤や医療機器の開発とは別に、多職種連携や病院間を越えた新しいシステムを開発することで医療資源の少ない地域の方々にも最善の医療を届けられるようになりたいと考え研究を行っています。

2. 助成研究の内容紹介

今回私の計画した研究は、医療者の不足を解消する事および都市部にある大規模医療施設との連携強化の点から検討しました。医療者が不足している地域医療の中で、病院の枠組みを超えて多職種連携を進めることで、必要な患者さんを可能な限り身近で適切な医療機関で対応することで医療の質を高めることができるような連携体制を構築する研究を行う。またセカンドオピニオンなど含めて都市部の大規模施設との連携において、地域の患者さんではセカンドオピニオンを受けに行くためには交通費などハードルが高い現状がある。今回秋田県内の病院を対象にテレビ電話などを用いて、患者さんを移動させることなくセカンドオピニオンの環境整備を検討している。

3. 2の将来に繋がる結果予想・目標

病院を越え、かつ多職種で連携できることにより地域のがん患者さんにより質の高い医療を提供する事ができる。また病院の規模に関わらず患者さんの状態にあわせて質の高い医療を提供する事により、患者さんの一極集中を防ぐことができる。

またWeb環境などを利用して大規模施設と連携をとることにより、地域の患者さんにも治療選択の幅を広げ、適切な治療を受ける機会を増やすことにつながる。これらの結果は、日本各地の同様の問題を抱える地域のモデルケースになることができると考えます。

4. 全国のRFL関係者に一言メッセージ

日本全国の患者さんを支えようと活動されているRFLの皆様に感謝申し上げます。それぞれの御活動を支援するとともに、よりよき医療環境構築のために精一杯務めさせていただきます。